

第4節 家族を支援者にするについての考察

1. 家族を支援者にするための要件と困難性

家族を職業リハビリテーションの領域で支援者にするための要件や困難性に関して、以下の4つに類型化して、まとめた。

(1) 家族が支援者になれる場合

家族、障害者本人とも、職業上の目的を達成したいと考えていることに加え、家族の構造・機能等のアセスメントの結果、家族が支援することによる負担感が、家族及び本人とも小さくなく、双方がある程度の精神的なゆとりを持って課題に取り組める場合、家族が支援者になれる可能性がある。例えば、石原ら（2006）のトータルパッケージホームワーク版の活用事例によると、課題の導入部分を支援機関が実施し、その後は自宅に課題を持ち帰り、自学自習を進める方法であれば、家族に負担がかかりすぎず、ゆとりをもって本人を支援できる状況を作り出すことが出来るかもしれない。

(2) 専門機関による手厚いサポートが必要な場合

家族、障害者本人とも、職業上の目的を達成したいと考えているが、家族の構造・機能等のアセスメントの結果、家族が課題を指導することによって、家族及び本人に大きな負担が生じる場合には、本人の生活支援や家族の精神的なサポートを行う専門機関が手厚く関与し、家族を支援者にする可能性を模索していくことになるであろう。実際には、こうした家族が相当数、存在するのではないかと推測される。

(3) 家族か障害者本人の何れかの動機が希薄な場合

家族、障害者本人の何れか一方が、職業上の目的を達成したいと考えているが、もう一方が、その動機に関して希薄な場合、家族を支援者とすることは、相当に困難となるであろう。例えば、精神障害を持つ人の家族が高 EE であったり、家族の疲労度がかなり高いため、レスパイトサービス（障害者の一時預かりサービス）が必要な家族等はこれに相当する。また、身体障害を持つ人の家族において、親子関係が纏綿状態になっており、家族の介入によって、自立とプライバシーが侵害されていると本人が感じているようなケースも、これに相当するであろう。

(4) 家族関係で深刻な問題を有している場合

家族・本人とも、職業上の目的を達成したいとは考えておらず、その他の深刻な問題に意識を向けざるを得ない状況に置かれている場合や、親のしつけの仕方が過剰であったり、逆に、過度な放任があり、本人に対する生活管理が著しく疎かになっている場合、親自身の生活の自己管理が著しく疎かになっている場合等は、家族を支援者とすることは困難であるといつて良い。状況によっては、親と障害児（者）を分離して生活させることが望ましいこともあり得るであろう。就労等の支援よりも、家族療法や福祉的な支援が中心となる家族と考えられる。

このように、支援者は、家族の状態（構造と機能）を的確にアセスメントし、それぞれの家族の個別のニーズに応じた適切な支援計画の下で支援していくことが重要と考えられる。

また、家族の状態は、家族構成員の病気や事故による入院、祖父母の介護等、人的環境の変動があるという視点でアセスメントしていかなければならないし、海津（2002）は、障害者の親の立場から「人は誰も訓練するためにうまれてきてはいない」、「現在を生きて楽しむ積み重ねがあって初めて、将来に繋がっていく。ともかくひたすら訓練・訓練という時代ではなくなったというのは事実だ」と述べている。こうした時代認識や多様な価値観によっても、家族支援のあり方が変容してくるものと思われる。

2. MWS ホームワーク版の活用に関して

家族支援を行う過程において、MWS ホームワーク版（以下「ホームワーク版」という）を活用する場合、実施に際し、留意すると望ましいと思われる事項につき仮説的に次の表にまとめた。表中の仮説的な留意事項に関しては、今後の臨床的な取り組みの中での検証していく段階といえる。

表. [補] — 4 — 1 家族支援における MWS ホームワーク版の活用

1. ホームワーク版実施前の仮説的留意事項
①障害に対する理解及び受容の促進
オリエンテーションや家族教室、親教育（親業訓練、ペアレントトレーニング）等の実施。
②家族が支援者になるためのレディネス
家族のアセスメント（家族の構造・機能の把握）結果、及び支援の動機付けが明確になっているか。
③社会資源（家族外サブシステム）の活用状況
有効に活用できているかをエコマップやソーシャル・ネットワークマップにて把握する。
2. ホームワーク版実施中の仮説的留意事項
①家族のくつろぎ機能のチェック
ヒアリングにより、家族の寛容さ等の状況を把握する。
②家族・障害者本人の疲労度チェック
ヒアリングや生活困難度チェック表によるチェック等を行う。
親の負担が大きい時には、レスパイトケアの利用等も考慮する。
③家族のヘルスケア
家族の否定的感情の緩和や心身・社会性のヘルスケアの向上に配慮する。
④家族へのサポート体制
家族へのサポートは適切に行われているか、定期的な連絡や要請による適切な対応を心がける。
課題が生じて家族を悪者にせず、エンパワーメントする。
親が障害者本人に厳しく指導しすぎて「善意ある加害者」になっていないか等サポートする。

《引用文献》

- Burns,R.C.& Kaufman;加藤孝正他訳(1972),子どもの家族画診断,黎明書房,1975,(1998 復刻)
- 千葉聡子(1999).家族によるしつけを困難にしている要因 -社会集団を必要とするしつけ,文教大学教育学部紀要,第 33 号, <http://www.bunkyo.ac.jp/faculty/lib/klib/kiyo/edu/e33/e3305.pdf>
- 後藤雅博(1998).家族教室のすすめ方—心理教育的アプローチによる家族援助の実例— 金剛出版
- 早樫一男他(2002).第二部,総論:相談・面接の基本 知的発達障害者の家族援助,金剛出版,pp.37-39
- Hogaty GE,Anderson CM,Reiss DJ et al (1986). Family psychoeducation,social skills and maintenance chemotherapy in the aftercare treatment of Schizophrenia.*Arch Gen Psychiatry*, 43, pp.633-642
- 一ノ瀬尚道(1996).慢性身体病と家族 下坂幸三編 精神医学レビュー No.18 精神科治療における家族 ライフ・サイエンス, pp.73-76
- 伊勢田堯(2006).「治療か支援か」—重症の精神障害者を抱える家族へのアプローチ, 家族療法研究,23,No.1, 自主シンポジウム 3 (第 23 回大会抄録集),p59
- 石原まほろ他(2006).地域障害者職業センターでの家族支援技法におけるトータルパッケージホームワーク版の活用 第 14 回職業リハビリテーション研究発表会論文集,pp.232-235
- 岩坂英巳他(2004).AD/HD 児へのペアレント・トレーニングガイドブック—家庭と医療機関・学校をつなぐ架け橋— じほう
- 「児童心理」編集委員会(2005).「気がかりな子」の理解と援助 金子書房
- 亀口憲治(2000).第 3 章 2 家族関係の構造的理解を促す技法 家族臨床心理学 —子どもの問題を家族で解決する,東京大学出版, pp.136-146
- 上別府圭子(2006).領域と研究法③家族 齋藤高雅編 臨床心理学研究法特論 放送大学教育振興会,pp.148-168
- 海津敦子(2002).発達の遅れのある子の親になる 日本評論社
- マーク・レーガン(2005).ビレッジから学びリカバリーへの道 金剛出版
- 村瀬嘉代子(1997).子どもと家族への援助—心理療法の実践と応用— 金剛出版
- 南雲直二(2002).社会受容—障害受容の本質— 荘道社
- 中村義行(2003).第 8 章 障害児の親・家族の心理と支援 障害臨床学,ナカニシヤ出版, pp.119-132
- 西山賢一(2000).2 章 特別講演「人間関係と連携」,リハビリテーションにおける連携とケアマネジメント—サービス提供と実践的課題—,リハビリテーション連携科学 Vol.1 No.1,日本リハビリテーション連携科学会,メディカルフレンド社,pp.8-18
- 野中猛(2001).第 2 編 3 情報の記録と加工 ケアマネジメント実践のコツ,筒井書房, pp.99-105
- 緒方明(2006).軽度発達障害の家族支援—成功例と失敗例から— 家族療法研究,23,No.1,p38
- 岡堂哲雄(1991).5 章 家族発達段階論 家族心理学講義,金子書房, pp.101-128
- 大島啓利・鈴木康之(1990).特論 3 障害者(児)を持つ家族,臨床心理学体系第 4 巻家族と社会,金子

- 書房,pp.267-284
- ローズマリー・ラムビー/デビ・ダニエルズ＝モーリング著;斎藤利郎訳(2002).教育カウンセリングと家族システムズ,現代書林
- 下坂幸三(1998). I .2 常識的家族療法 心理療法の常識,金剛出版,pp.45-46
- 四ノ宮美恵子他(2003).高次脳機能障害を有する患者の家族に対する心理的援助,国リハ研紀 24 号平成 15 年, <http://www.rehab.go.jp/kiyou/japanese/24th/24-05.pdf>
- 白石弘己(2005).第 4 章 統合失調症とはどんな病気か 家族のための統合失調症入門,河出書房新社,pp.88-114
- ショーナ・ラッセル/マギー・ケアリー編;小森康永/奥野光訳(2006).ナラティブ・セラピーみんなの Q & A,金剛出版
- 須田真侑子・坂田周一(2006).障害者の母親に対する支援,立教大学コミュニティ福祉学部紀要第 8 号,立教大学コミュニティ福祉学部研究センター,pp.101-108
- 高森信子(2005).第 1 章 家族が変われば子どもが変わる あなたの力が家族を変える,全国精神障害者家族会連合会,pp.15-59
- 玉井真理子(2002).障害児の親になっていくこと,「育児不安」,こころの科学 No.103,日本評論社,pp.62-66
- 鑓幹八郎(1963).精神薄弱児の親の子供受容に関する分析的研究,京都大学教育学部紀要 9,pp.145-172
- 立木茂雄(1999).家族システムの理論的・実証的検証―円環モデル妥当性の検討,川島書店
- 田上美千佳・長直子(2004).第 10 章.3.患者さんへの対応の工夫により家族の安定をはかる シリーズ・ともに歩むケア「家族にもケア―統合失調症はじめての入院」精神看護出版,pp.119-121
- 田澤あけみ(1996).第 4 章 3 節 障害児をもつ家族の問題と家族援助の特色 障害児福祉・家族援助のあり方,一橋出版,pp.64-65
- 泊祐子・豊永奈緒美(2005).障害児を育てる親の「親となる」意識の発達,岐阜県立看護大学紀要第 6 巻 1 号
- T・ローワン/B・オハンロン著;深谷裕/丸山晋監訳(2005).「精神障害への解決志向アプローチ」,金剛出版
- 土屋葉(2002).障害者家族を生きる,勁草書房
- 綱川香代子(2004).第 2 章第 1 節 職業リハビリテーションにおける家族支援の考え方 高次脳機能障害を有する者の就業のための家族支援のあり方に関する研究,障害者職業総合センター調査研究報告書 No.58,pp.18-22
- 渡辺顕一郎(2006).第 5 章 FLE「障害のある人たちのすてきな親になるための講座」の概要と内容,障害児の自立を見すえた家族支援～ 家族生活教育を中心に,p10,pp.91-92,中央法規出版
- 渡辺俊之・本田哲三編(2000).リハビリテーション患者の心理とケア,医学書院
- 横山知行(1998).第 2 章うつ病の心理教育的家族面接,家族教室のすすめ方,金剛出版,pp.42-52

吉川 悟(2004).第 5 章Ⅳ ナラティブ・セラピーの主要な方法論 セラピーをスリムにする,金剛出版,pp.76-81

ぜんかれん編集委員会(2000).第 2 章 学びたいこと ぜんかれん家族講座 4 ～家族がいきいきしくくっちゃ,全国精神障害者家族会連合,pp.47-82

《参考文献》

位上典子(2005).地域障害者職業センターでの家族支援技法におけるトータルパッケージホームワーク版の活用について 第 13 回職業リハビリテーション研究発表会論文集,pp.112-115

神奈川県リハビリテーション支援センター・神奈川県保健福祉部障害福祉課(編)(2006).高次脳機能障害相談支援の手引き～支援の導入と障害の理解～

亀口憲治(2004).7 家族 心理臨床大辞典 培風館 pp.1242-1243

亀口憲治(2006).第一部解説編 心理療法プリマーズー家族療法 ミネルヴァ書房,pp.3-72

加藤孝正(2006).動的家族画法(KFD) 心理査定実践ハンドブック 創元社, pp.750-757

松田孝治・安村直己(1990).第Ⅳー 3 章第 4 節 精神力動的アプローチその作業と地域特性 臨床心理学体系第 4 巻 家庭と社会 金子書房,pp.190-19

岡堂哲雄(1990).家族臨床心理の理論モデル 臨床心理学体系第 4 巻家庭と社会 金子書房,pp.41-75

東京都知的障害養護学校就業促進(2003).個別移行支援計画 Q&A 基礎編 ～一人一人のニーズに応じた社会参加へのサポート,ジアース教育新社

補遺巻末資料 ーアセスメント法一覧ー

<家族の構成>

○ ジェノグラム（家族図）

マレー・ボウエンや家族療法に多世代的な接近をしている人のみならず、一般的に使われる。

○ エコマップ（生態図）

ハートマンにより開発された家族を取り巻く社会資源を把握する図である。どのような資源が利用可能で不足しているかを視覚的に一目で理解できるように表したもの。

・ ソーシャル・ネットワーク・マップ（円のマップ）

7 領域（世帯、家族や親戚、友人、職場や学校、クラブや組織や境界、近隣の人々、関係機関や他のフォーマルなサービス提供者）を円のマップに書き込む。

<家族の機能>

○ 日本社会版家族システム評価尺度（FACESKG IV : Family Adaptability and Cohesion Evaluation Scale at Kansei Gakuin ; 立木茂雄）

オルソンの円環モデル（きずな、かじとり）に基づく、家族システム評価尺度（FACES）の立木による日本版である。

○ 動的家族画法（KFD ; Kinetic Family Drawings）

1970 年バーンズらが発表。「自分を含めた家族の人たちが何かをしているところの絵を描く」もので、自己概念や家族構成員との関係、相互関係等クライアントの家族力動関係が描画に反映してくる。

・ 円枠家族描画法（F-C-C-D : Family-Centered-Circle-Drawings）

1990 年にバーンズにより発表。円枠は東洋のマンドラを発想点としている。円枠の中心に 1 枚ずつ父親像、母親像、自己像を描き、その周辺に自由連想するものを描く。家族に関するイメージや家族力動が浮き彫りにされてくる。

・ 親子関係診断検査（FDT : Family Diagnostic Test）

親の養育やしつけの態度に対して、「受容」―「拒否」と、「支配」―「服従」という 2 つの直交軸で 4 つに区分された領域のどこに位置するかを分類し、親の養育態度のタイプを判定する。子ども 8 尺度、大人 7 尺度。市販製品。

・ 夫婦関係燃え尽き尺度（Marital Burnout）

エリクソン（Ericson RJ）の開発（12 項目）。主に就労している既婚女性の結婚生活における諸問題調査に使用されている。

○ 生活困難度チェック表 16 問（大島巖 ; 全家連保健福祉研究所）

家族の感じる困難感を知るための尺度である。一応の目安で 7 以上を高困難のグループとしている。患者本人の退院時の調査では、家族の平均点が 8.6 点で、およそ家族の 2 人に 1 人が高困難に入る。

- ・ FAD (Family Assessment Device : 家族機能評価尺度)

下位尺度には、問題解決、意思疎通、役割、情緒的反応、情緒的関与、行動統制、全般的機能の 7 つがある。

- ・ 日本語版家族力学尺度 II (FDM : Family Dynamics Measure II)

家族力学の尺度は Barinhill の 6 側面、「個別性—巻き込み」「相互依存—孤立」「柔軟性—硬直性」「安定性—無秩序」「明確なコミュニケーション—不明確なコミュニケーション」「役割相互依存—役割葛藤」を使って構成している。

- 家族イメージ法 (FIT : Family Image Test) (亀口憲治 ; 東京大学大学院)

5 色のシールを使って自分の家族を描く。シールの色の違いは力の差、どのような関係であるかは、線の太さ等でむすびつきの強さを表す。市販品。

- ・ 文章完成法 (SCT : Sentence Completion Test)

パーソナリティ全体を概観することを目的に開発されたものだが、家族内価値の明確化にも使用できる。「お母さんはいつもこういった・・・」等の家族に関する項目が含まれている。市販品があるが、家族に焦点を当てた必要な項目で作成実施することも可能である。

- ・ 家族彫像化 (家族彫刻)

家族を理解するためのロールプレイで、家族成員を彫刻に見立て、家族関係に合わせて結びつきが強いものを近くに、弱い者を遠い位置に配置し、姿勢も表現してもらう。「家族ふりつけ法」は、ある出来事の場合で配置してからその場面を演ずると動的な要素を入れている。

- ・ 役割カードゲーム

家族内で、各々の成員が担っている仕事や相互作用的な役割を明らかにする非言語的な技法である。家族成員はどんな仕事があるか、その仕事をどのように分担しているかを知ることができる。

- ・ パートナーズ・テスト調査票

ミネソタ大学のオルソン教授が作成したプリペア質問票・エンリッチ調査票の日本語作成版として実用化に向けて取り組まれている。カップル間で対立や葛藤が生じやすい 14 領域の質問である。

(注) ここで、○印は補遺の本文中で取り上げたアセスメント法である。

[引用・参考文献]

岡堂哲雄 (2006) 家族というストレス—家族心理士のすすめ, 新曜社

R. シャーマン/N. フレッドマン ; 岡堂哲雄他訳 (1990) 家族療法技法ハンドブック, 星和書店

氏原寛他編 (2006) 心理査定実践ハンドブック, 創元社